校内研修モデル（試案）

1. 教職員の特別支援教育に対する意識を測る意識調査

* 校内研修①の事前事後、校内研修②の後、校内研修②実施から１ヶ月後の計４回行うことが望ましい。

|  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- |
| 特別支援教育について   * 当てはまる数字を１つ選んで◯をつけてください。 | あてはまらない | ややあてはまらない | ややあてはまる | あてはまる |
| 1. 特別支援教育について、学んだり調べたりする必要性を感じる。 | １ | ２ | ３ | ４ |
| 1. 特別支援教育について学んだり調べたりすることが、学級経営や授業づくり、児童生徒への対応等に役立つと思う。 | １ | ２ | ３ | ４ |
| 1. 特別支援教育に取り組むことは難しくないと感じる。 | １ | ２ | ３ | ４ |
| 1. 特別支援教育について、理解を深めたい。 | １ | ２ | ３ | ４ |
| 1. 特別支援教育について、学んだり調べたりしたことを実践したい。 | １ | ２ | ３ | ４ |
| 1. 同僚にアドバイスしたり、知識や経験を全体で共有したりするなど、学校における特別支援教育の推進に貢献したい。 | １ | ２ | ３ | ４ |
| 1. 特別支援教育について、様々な方法で学んだり調べたりしている。 | １ | ２ | ３ | ４ |
| 1. 特別支援教育について、学んだり調べたりしたことを実践している。 | １ | ２ | ３ | ４ |
| 1. 児童生徒や保護者への対応等、特別支援教育に関わる課題を解決する上で、もっと良いやり方や別の考え方はないかと考える。 | １ | ２ | ３ | ４ |
| 1. 同僚や外部機関と協力して、特別支援教育に関わる課題を解決することも多い。 | １ | ２ | ３ | ４ |
| 1. 特別支援教育推進のための校内体制づくりをする上で、**最も重要だと考えることを、次のうちから３つ選び、優先順に番号をお書きください。** | | | | |
| 1. 管理職のリーダーシップ 2. 通常の学級担当者の理解 3. 特別支援教育コーディネーターの専門性 4. 全教職員の協力 5. 特別支援学級・通級指導教室担当者の専門性 6. 外部機関との連携 | 優先順 | | 番号 | |
| １ | |  | |
| ２ | |  | |
| ３ | |  | |
| 1. その他（具体的にお書きください。） | | | | |

1. 校内研修モデル（試案）
2. 校内研修①
   1. 「個に応じた指導」についてのアンケート（事前調査）

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| **児童生徒との関わりについて** | | |
| 下記に示したような実態の児童生徒に対し、本人から事情を聞いた後、あなたならどのように対応しますか。または、対応していますか。 | | |
|
| 実態 | | 対応 |
| １ | 授業中に寝る、授業用具を準備しない、課題に取り組まない、宿題を忘れる等、学習意欲が低いように見える。 | 例：授業中に寝る児童生徒に対して、興味が湧くような導入を考えた。 |
|  |
|
|
| ２ | 不登校傾向である、自傷行為や校則違反をする、対人関係でトラブルが多いなど、生徒指導上の課題がある。 | 例：不登校傾向の児童生徒に対して、家庭訪問をして、家庭の状況を把握するとともに、保護者と共通理解を図った。 |
|  |
|
|

* 1. プランシート

【ねらい】

障がいの特性等に関する理解を深めたり、特別な教育的支援を必要とする児童生徒への指導方法を工夫する力を高めたりする方法を獲得する。

【タイムテーブル（50分）】

|  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- |
| 所要時間 | スライド | 内容 | 準備物等 |
| ３分 | １〜７ | 【説明①】課題の整理と共有、目標の提示   * 自校における特別支援教育の全校的な推進に関わる現状と課題の確認。（事前に実施・集計した意識調査Ⅰの結果を示す。） * 目標の提示   全教職員に求められる特別支援教育に関わる４つの力を確認し、「障がいの特性等に関する理解」と「指導方法を工夫できる力」を身に付けるための方法の獲得が目標だと示す。 | ・プロジェクタ、PC |
| 15分 | ８〜10 | 【演習①】既に獲得している知識・技能の自覚と共有   * 対応したことのある児童生徒を思い浮かべながら、LD、ADHD、自閉症の特性についての知識を共有。※一般的な特性を示すこと（答え合わせ）はしない。 * 個人演習（２分）   思い付いたことを付箋１枚につき１つ書く。  ※「こだわりが強い」等の一般的な特性だけでなく、「お腹が痛いのにやるべきことを終えないとトイレに行けない」といったように詳細が書ける人は詳細を書くよう指示。続くグループ演習において、「同じ障がい種でも多様な児童生徒がいるのだ」という理解に繋げるため。   * グループ演習（７分）   個人演習で付箋に書いたことをグループ内で共有し、模造紙上で、同じような付箋をまとめていくつかに分類し、小見出しをつける。  ①各グループの人数を５名程度までに調整し、付箋とマジックを配付する。※グループごとに付箋の色は分ける。マジックはケースごと渡す。  ②司会、記録、発表、道具、時間の役割を与える。その際、「司会は、『〇〇先生、発表お願いします。』と言うだけ、記録は小見出しを書くだけ、発表はワークシートを手掛かりに発表するだけ、道具は必要な道具の配付と回収、時間はタイムキーパーです。」と、簡単な仕事内容を説明してから、役割分担を行う。（例「緑色のマジックを選んだ方が記録をお願いします。そこから時計回りに、発表、道具、時間、司会としましょう。」※教職員の実態を考慮して役割分担を行うが、参加者にとってはランダムに決められたと感じるようにする。）   * 全体共有（５分）   道具係が分類シートを掲示し、発表係が各グループの協議の結果を発表する。 | ・付箋、マジック、模造紙 |
| ７分 | 11〜21 | 【説明②】演習①で自覚した知識・技能への価値付け、新たに獲得すべき知識・技能の獲得方法の提示   * 「特殊教育」との比較から「障がいの有無にかかわらず、個々に合った対応をする」という「特別支援教育」の考え方を確認。 * 教職員が実践してきた「個に応じた指導」と「特別支援教育」の関連を示す。 * 「指導方法を工夫できる力」の獲得には、多様な視点からの実態把握が有効であることを示す。 |  |
| 15分 | 22〜25 | 【演習②】説明②で提示した獲得方法の実践（教職員の多様性を生かした協働的な学び）   * 通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒１名について、困難さの要因をできるだけたくさん予想する事例検討を行う。 * 事例となる児童生徒の現状の把握（３分）   事例提供者を中心としながら事例となる児童生徒の状態を簡潔にまとめ、模造紙の上部に書く。   * 個人演習（２分）   事例となる児童生徒の困難さの要因として考えられることを、一枚の付箋に1つ書く。※思い付く限りたくさんあげる。   * グループ演習（５分）   模造紙上で、同じような付箋をまとめていくつかに分類し、小見出しをつける。   * 全体共有（３分）   道具係が分類シートを掲示し、発表係が各グループの協議の結果を発表する。 | 付箋、マジック、模造紙 |
| 10分 | 26〜33 | 【説明③】獲得した知識・技能の汎用性の提示   * 「個別最適な学び」と「協働的な学び」を確認。 * 特別支援教育と「個別最適な学び」の関連、演習①、②と「協働的な学び」の関連を説明。 * SNSトラブルに関する数値を示し、演習①、②で体験した教職員の「協働的な学び」は生徒指導等の特別支援教育以外の課題を解決することにも有効なことを示し、今後1ヶ月の間に、グループごとに特別な教育的支援を必要する児童生徒以外に事例を変えて演習②を行う（校内研修②）ことを予告する。 |  |

* 1. スライド資料と説明原稿

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
|  | スライド | 説明原稿 |
|  |  | 突然ですが、何を示した数字でしょうか。 |
|  |  | 実は、みなさんに事前に答えていただいた意識調査の結果でした。  上の２つは「特別支援教育を学んだり調べたりする必要性や、有効性を感じている」と答えた方の割合。下の数字は、「特別支援教育に取り組むことは難しくないと感じる」「実践している」と答えた方の割合です。  この結果から言えるのは、特別支援教育を理解する必要性や有効性は感じているし、理解したいとも思っている。でも、実際に行動するのは難しい。と感じている方が多い、ということ。 |
|  |  | さて、特別支援教育に取り組むことは本当に難しいのでしょうか。初めにお伝えしますが、私は誰でも、今すぐにでも特別支援教育に取り組むことができると考えています。今日は「特別支援教育ってなんか難しそう」という気持ちが少しでもなくなればいいなと思いながらお話します。 |
|  |  | そもそも、なぜ特別支援教育を理解する必要があるのか。  中学校学習指導要領解説総則編に「通常の学級にも、障がいのある生徒のみならず、教育上特別の支援を必要とする生徒が在籍している可能性があることを前提に、全ての教職員が特別支援教育の目的や意義について十分に理解することが不可欠である。」と示されています。  では、ここで言う、「理解する」とは、具体的にはどのようなことなのでしょうか。 |
|  |  | 特別支援教育に関わって、全ての教師に必要な力として、令和3年答申に次のように示されています。つまり、「ただ知っている」という理解ではなく、実践できるレベルの理解が求められているということです。1つ1つ見ていきますと、「合理的配慮」「個別の教育支援計画、個別の指導計画」については文献を読んだり、他の学校や地域の実践例を検索したりすれば、それなりに理解できると思います。  一番先生方が必要性を感じ、難しいと感じているのは、「障害の特性等に関する理解」と「指導方法を工夫できる力」ではないでしょうか。ここについて、「専門性がある」とは言えず、「自信がない」と感じている方も多いのではと思います。 |
|  |  | さて、一つ目の、「障がいの特性等に関する理解」を、どう身に付ければよいのでしょう。これも、わかりやすくまとめられた資料や、特別支援学校教員免許取得のためのテキストを読めば書いてあります。でも、文献や教科書を読んだだけで、「使える知識」になるのでしょうか。実は、文献や教科書には、一般的な事柄しか書かれていないことが多いです。どんな特性が強いかは生徒によって様々だし、同じ生徒でも時期や環境によって違ったりするので、障がい等に関する理解とは、もはや「生徒の特性等に関する理解」ではないかな、と思います。  この生徒理解を深めていくには、実際に様々な生徒の実態把握をする経験を積むしかないのではないかと感じています。 |
|  |  | でも、私たちは特別な教育的支援を必要とする生徒の個々の特性を強く意識する機会が、特別支援学校の先生方に比べたら圧倒的に少ないと思うのです。先生方が、「自信がない」「難しい」と感じて当たり前だし、だからと言ってたくさんの経験をすぐに積み重ねるなんてことも難しいでしょう。  だったら、みんなの経験を共有しませんか。一人一人が関わった生徒の実態を共有できれば、自分が出会わなかった生徒の実態も知る機会になるのではと思います。 |
|  |  | ということで、ここで、障がい特性について、みなさんが知っていることを共有しましょう。全部について考えるは大変なので、発達障がいに含まれる主な３つの障がい「LD」、「ADHD」、「自閉症スペクトラム」について、１学年⇨LD　２学年⇨ADHD　３学年⇨自閉症と分担しましょう。知っていることを一つの付箋に一つずつ書いてみてください。文献を読んで得た知識でも、実際にこれまで対応した生徒のことを思い浮かべて書いていただいてもかまいません。  このあと、グループ活動→全体発表としますが、答え合わせをしたいわけでなく、色々な実態があることを共有するのが目的なので、例えば「こだわりが強い」だけでなく「マイルールが強すぎて、お腹が痛いのにプリントを終えないとトイレに行けない」などと、書ける先生は詳細に書いていただけるとありがたいです。それでは始めてください。 |
|  |  | 次は、各グループで活動していただきます。  まず、それぞれが書いたことを発表しあってください。次に、模造紙上で同じような内容の付箋ごとにまとめて、その内容をざっくり表す小見出しをつけます。  活動をする前に、役割分担をします。  司会は、話し合いの進行です。グループの皆さんは進行しやすいようにご協力お願いします。  記録は、みなさんが話し合ったことを書くだけです。書く内容はみなさんで考えてくださいね。  発表は、記録がまとめてくれた内容を発表するだけです。  道具は、掲示や道具を片付ける時にお手伝いいただきます。  時間は、タイムキーパーです。グループの話し合いが時間内に終わるように声かけをお願いします。  質問はありますか？では、始めてください。 |
|  |  | それでは、各グループの道具係の方、模造紙を前に掲示してください。発表係の方は発表の準備をお願いします。  （発表後）一人ひとりの知っていることをグループで共有する中で、関連付けられたり、内容を充実させたりできたのではないでしょうか。椅子だけでよいので、前を向いていただけますか。 |
|  |  | さて、先ほどの４つの力に戻ります。  今の活動で、研修前より「障がいの特性等に関する理解」が深まったということで、☑︎を入れましょう。  次に、「指導方法を工夫できる力」は、どうやって身に付けるか。 |
|  |  | それについて考える前に、そもそも特別支援教育ってなんなの？ということを確認しましょう。  我が国の特別支援教育の考え方として次のように示されています。  「指導方法を工夫する」ということは、つまり、「子供一人一人の教育的ニーズを把握し、」「適切な指導及び必要な支援を行う」といったこととも考えられるのではないかと思います。 |
|  |  | 平成18年にそれまでの「特殊教育」にかわって「特別支援教育」が学校教育法に位置付けられ、平成19年から本格実施されました。  「特殊教育」では障がいの有無に応じて、盲・聾・養護学校や特殊学級といった特別な場で、手厚くきめ細かい教育を行うことに重点が置かれてきましたが、「特別支援教育」では、特殊教育の対象となっていた子供たちに加えて、通常の学級に在籍する発達障がいのある児童生徒にも適切な指導や必要な支援を行うものと示されました。 |
|  |  | そして発達障がいのある児童生徒について、医学的な診断がなくても、教育的ニーズを把握し、それに対応した指導等を行う必要があるとも示されることから、障がいがあるのか、ないのか、として捉えるのではなく、「みんな特性はある。どんな特性がどのくらい現れるかは人それぞれ違う」というように、連続性の中で捉える考え方になったと言うことができます。  発達障害に含まれる主な障害を例にしますと、この「自閉症スペクトラム」の「スペクトラム」は、「曖昧な境界を持ちながら連続している」という意味です。これは、自閉症だけでなく、全ての特性に言えることなので、境界線をぼかしたグラデーションの図で表してみました。円の外側に位置しているから支援しない、円の中心にいるから支援する、ということではないということです。  更に言えば、「私たちにも強くないだけで、そういう傾向がある」ということです。 |
|  |  | また、発達障がいに含まれる主な障がいの特性がこのように重なり合うことにも注目してみて下さい。さらに、ADHDと自閉症スペクトラムは、知的な遅れを伴うこともあります。  だから、「この子はADHDだから、こうなんだろう」という見立てだけでは、なかなか有効な手立てを講じにくいということもあると言えます。なので、みなさんが先ほど出し合って下さった発達障害の特性を共有することが、とても意味のある活動だったと思います。 |
|  |  | つまり、特別支援教育の考え方は、障がいの有無や診断名にかかわらず、「みんな一人一人違うはずだ」という認識からスタートしていて、だから、一人一人のことを深く、細かく理解して、適した対応を考えようというものである、ということです。 |
|  |  | さて、事前アンケートに、学習指導や生徒指導で気になる生徒への対応を書いていただきました。  あれは、いわゆる「個に応じた指導」を答えていただく設問でした。  学習指導だけでこんなに書いていただきました。ありがとうございました。 |
|  |  | 印象的だったのは、「実態や状況を把握する」「生徒の実態に応じて、達成できそうな課題を与える」と書いていた方が多かったということです。  きっと、みなさん目の前の生徒に対して、「何が難しいのかな？」「どんなことで困っているのかな？」と考えながら理解しようと努め、「もしかして興味がないのかな」「使った言葉が難しいのかな？」などとあれこれ要因を予想し、「それならこうしてみようかな」と対応を工夫する。そして対応が効果的だったか生徒の様子を見る、といったサイクルで対応しているのではないでしょうか。 |
|  |  | この、「生徒のことを理解して指導方法を工夫する」って、特別支援教育の考え方そのものじゃないでしょうか。「実践は難しい」と言いつつ、みなさん、すでに実践されているなと思いました。あとは、「より個々を深く、細かく理解する」ということを意識するだけではないかと思いましたので、次のようにコツをまとめてみました。 |
|  |  | 先生方が「専門性がある」と感じている特別支援学校の先生方も、実態把握をするときはこのように考えているそうです。  「なにが難しいんだろう？」「どこがわからないのかな？」「どうしてできる時もあるの？」「もしかして◯◯だからかな？」「どんな時に困難さが際立つのだろう？」などと、困難さの要因になっていることをたくさん予想することがやはり有効だということです。 |
|  |  | つまり、生徒をより深く理解するためには、様々な視点から細かく生徒のことを見取ることが大事。  でも、これを一人でやるのは難しくないでしょうか。  注目する部分は先生方によって違うでしょうし、一人一人違う特性である生徒を、一人の先生が分析しようと思っても限界があります。  パートナーティーチャーの先生からアドバイスをいただくことも一つの方法ですが、生徒が１０人いれば１０回、１００人いれば１００回アドバイスをもらうのは、現実的ではありません。  だから、これも、今日はみんなでやってみましょう。 |
|  |  | 各学年で一名、通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする生徒について、事例をあげてくださいとお願いしていました。  まず、グループで活動していただきたいのですが、  ①今日、深くアセスメントしたいと考えている生徒の、現在の状態を簡単にまとめます。  ②その内容を、模造紙の上部に書いてください。 |
|  |  | その生徒に対し、まずは個人で「なぜこのような状態なのか？」例えば、「授業中寝てしまう」という生徒なら、寝てしまう要因となっていることをできるだけ沢山予想して書きます。一枚の付箋に一つずつ書いてください。  この時、「もし障がい特性が要因としてあるとしたら…」というように、先程みなさんで共有した特性も踏まえて考えてみてください。  生徒を理解する視点を広げることが目的ですから、とにかく、質より量重視です！  答えはありませんから、斬新な思いつきもどんどん書いてみてくださいね。  例えば、「授業中に寝る」生徒だったら、「実は狸寝入りで、反抗的な態度をとるために寝たふりするのがマイブームだから」など。 |
|  |  | それでは、さっきのように学年グループ内で共有、整理し、小見出しをつけてください。 |
|  |  | それでは、各グループの道具係の方、模造紙を前に掲示してください。発表係の方は発表の準備をお願いします。 |
|  |  | さて、いろいろな要因を予想してみたら、それを確かめたくなりませんでしたか？確かめるために「声をかけてみようかな」、「こんな活動をさせてみようかな」「こんな提案をしてみようかな」などと思いませんでしたか？  これって、「対応を工夫」していますよね。  生徒の理解を深めつつ、より効果的な指導方法を工夫していくことって、こうやって一体的に行っていくものかなと思います。  そして、対応してみて、うまくいったこと、うまくいかなかったことについて、もう一度みんなで共有し、次の方針を検討することを繰り返していくことによって、どんどんその生徒に合った手立てに近づいていくことができると思います。 |
|  |  | これで、「指導方法を工夫できる力」も、すでに先生方はお持ちだということがわかりました。  先生方が「難しいな」と感じていた、「障がい特性等について理解を深め、指導方法について考える」ことが、この短時間でできてしまいましたね。 |
|  |  | さて、少し特別支援教育の話から離れますが、新しい学習指導要領についてお話します。今回の学習指導要領には前文が設けられ、次のようなことが示されました。これからは、「自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働」することが求められる、と。 |
|  |  | そのために、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実させていくと、「主体的・対話的で深い学び」の実現につながり、前文に示されている「自分のよさや可能性を認識する」「多様性を尊重しながら、協働する」といったことの実現につながりますよ、ということも示されました。  この「個別最適な学び」とは、教師視点の概念である「個に応じた指導」を、学習者視点の概念に言い換えた言葉ですね。生徒の立場に立って、個に応じた指導をより一層充実させていきましょうということです。これから求められる教育は、「一人一人が違う」という前提に立つことであると言えるのではないでしょうか。  その上で、「協働的な学び」を通じて、個々の「違い」が発揮され、集団の力が高まっていく。そういったことが実現した学級や学校は、きっと、「社会の創り手」にもつながっていくはずです。  今日は、その「個に応じた指導」をすでに先生方は実践されている、ということが明らかになりました。さらに、「自分のよさや可能性を認識する」「他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働する」といったことを、演習を通して先生方ご自身に体験していただきました。 |
|  |  | 意識調査の最後に、特別支援教育を全校的に推進するために、最も重要だと考えることを答えていただく設問がありました。半数以上の方が「全教職員の協力が最も重要だ」と考えていることがわかりました。先ほどの演習でも体験していただいたように、個々で取り組んでいてはなかなか解決策が思い浮かばないことも、多様な先生方と意見を交流することで、考えが広がったり、新しい視点に気づいたりしたのではないでしょうか。今日は対応策まで考える時間を設定できませんでしたが、多様な視点で生徒のことをアセスメントすることで、おのずと対応策も考えつくようになると思います。 |
|  |  | 先程の、特別支援教育の考え方とも共通していますね。  障がいの有無に関わらず、生徒には一人一人違った特性があるように、私たち教職員も年齢や性別、経験年数や役割など様々な違いがあるからこそ、それぞれの良さや強みを活かして、多様な生徒に対応できるのだよな、と思いました。それを理解して、尊重する、活かす、ということが、特別支援教育に限らず様々な課題を解決していくことにつながるのだろうな、と思っています。  もっと障がい特性について理解したい、どんな対応策があるのか知りたい、といった方のために、参考になりそうな資料のURLを一覧にしたものを配付していますので、ぜひご活用ください。 |
|  |  | さて、最後に、また４つの数字を並べてみました。  それぞれ何を示す数字かと言うと、 |
|  |  | 中学生のスマホ所持率は平成２９年度の内閣府の調査で66.7％という結果が出ています。NTTドコモの調査では、SNSに顔や制服が写った写真や動画を投稿したことがあると答えた子どもが42％、SNSに他者への批判・文句を投稿したことがあると答えた子どもが28％いるとのことです。  今後、ますますスマホ所持率も高くなっていくことが予想されますが、それに伴って、このように、SNSでのトラブルも増えると考えます。  下の数字は、トラブルにあった時の対処の仕方について聞いた項目です。親に相談するのは約半数。一番多くの中高生が選んだのは「インターネットで調べる」という方法でした。  この結果から、子どもたちがトラブルに巻き込まれた時、「なかなか大人に相談できない」と考えられるのではないでしょうか。  SNSやスマホについては、残念ながら私たち大人より、子どもたちの方が使いこなしているのが現状です。私たちが知らない世界でのトラブルに対して、どう指導していくかを考える時に、今日のように多様な先生方の視点を活かして、みんなで最適解を探っていく、ということがとても有効だと思います。  そこでお願いなのですが、今日のように、「多様な先生方の視点を生かして一人の生徒のことを深く、細かく理解する」ということを、ぜひ今後、別の機会でも実践していただきたいのです。  そのとき対象となる生徒に、明確な障がいがなかったとしても、今日、みなさんで共有した障がいの特性や、細かく見るということを意識することによって、その生徒に対する指導や支援の可能性を広げられるはずです。今後１ヶ月の間に、グループごとに特別な教育的支援を必要とする生徒以外の生徒について、今日の演習②のような事例検討をしてみてください。取り組んだ後、「意識調査」と「アンケート」に回答し提出をお願いします。以上で説明を終わります。 |

* 1. 補足資料（校内研修①終了までに参加者の手元に配布）



* 1. 校内研修①事後アンケート

|  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- |
| 職名 |  | 氏名 |  | |
| 1. 本日の校内研修について | | | | |
| 1. 自身の今後の取組に役立つ内容だったか。 | | | | （不十分→１、十分→５）  １　２　３　４　５ |
| 【お気付きの点があればお書きください。】 | | | | |
| 1. 資料はわかりやすかったか。 | | | | （不十分→１、十分→５）  １　２　３　４　５ |
| 【お気付きの点があればお書きください。】 | | | | |
| 1. 講師の説明はわかりやすかったか。 | | | | （不十分→１、十分→５）  １　２　３　４　５ |
| 【お気付きの点があればお書きください。】 | | | | |
| 1. 本日の研修で学んだことや気付いたことを教えてください。 | | | | |
|  | | | | |

1. 校内研修②

【ねらい】

校内研修①の演習②における「教職員の多様性を生かした協働的な学び」が特別支援教育以外のテーマにおける課題解決にも有効であることを体験的に理解する。

【実施方法】

以下３点の条件を提示し、学年グループや研修グループ等、講師側で指定したグループごとに任意の日程、テーマで実施する。

1. 校内研修①終了後１ヶ月以内に実施すること
2. 特別な教育的支援を必要とする児童生徒以外を事例とした演習②のような事例検討を行うこと
3. 各グループで実施後、アンケートを提出すること
   1. 校内研修②事後アンケート

【教職員用】

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| **Ⅰ.校内研修①後の取組について 　「４：あてはまる、３：ややあてはまる、２：ややあてはまらない、１：あてはまらない」から１つ数字を選んで答えてください。** | | |
| 1 | 1校内研修①で配付した資料を活用した。 |  |
| 【１で「４：あてはまる」「３：ややあてはまる」と答えた方は**具体的な活用法**を、 「２：ややあてはまらない」「１：あてはまらない」と答えた方は**その理由**をお書きください。】 | | |
|  | | |
| 2 | 校内研修①で事例検討した児童生徒について「学年で更に要因を予想する機会を設けた」「要因を確かめるために行動した」「共有した情報をもとに対応策を考えた」など、個人や学年で支援に向けた取組を行った。 |  |
| 【２で「４：あてはまる」「３：ややあてはまる」と答えた方は**具体的な内容**を、 「２：ややあてはまらない」「１：あてはまらない」と答えた方は**その理由**をお書きください。】 | | |
|  | | |
| **Ⅱ. 校内研修②について 　「４：あてはまる、３：ややあてはまる、２：ややあてはまらない、１：あてはまらない」から１つ数字を選んで答えてください。** | | |
| 1 | 学年の教職員それぞれの気付きや情報を共有することができた。 |  |
| 2 | 学年の教職員一人ひとりが発言する機会や時間を十分に取ることができた。 |  |
| 3 | 学年の教職員の気付きや情報を共有することで、生徒理解が深まった。 |  |
| 4 | 教職員の多様性を生かして児童生徒個々について理解を深める研修が、特別な教育的支援を必要とする児童生徒以外の事例検討にも有効だと感じる。 |  |

【管理職用】

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| **校内研修①後について 　「４：あてはまる、３：ややあてはまる、２：ややあてはまらない、１：あてはまらない」から１つ数字を選んで答えてください。** | | |
| 1 | 校内研修①で配付した資料を、教職員が活用している様子が見られた。 |  |
| 【１で「４：あてはまる」「３：ややあてはまる」と答えた方は**具体的な活用法**を、「２：ややあてはまらない」「１：あてはまらない」と答えた方は**予想される要因**をお書きください。】 | | |
|  | | |
| 2 | 校内研修①以降、特別な教育的支援を必要とする児童生徒等について、各学年で集まって話題にする等、教職員が協働的に特別支援教育を推進しようとする場面が見られた。 |  |
| 【２で「４：あてはまる」「３：ややあてはまる」と答えた方は**具体的な内容**を、「２：ややあてはまらない」「１：あてはまらない」と答えた方は**予想される要因**をお書きください。】 | | |
|  | | |

1. 校内研修③
   1. プランシート

【ねらい】

４回の意識調査の結果から、自己評価の変容やその要因について振り返る。

【タイムテーブル（30分）】

|  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- |
| 所要時間 | スライド | 内容 | 準備物等 |
| ３分 | １～２ | １【研修のねらいの確認】   * 本研修の目標とタイムスケジュールを提示 | ・プロジェクタ、PC |
| 10分 | ３～８ | ２【教職員集団全体の変容の共有】   * 意識調査の結果と、結果をもとに分析した成果と課題を共有。 |  |
| 15分 | ９～10 | ３【教職員個人の振り返り】   * 意識調査やアンケートへの自身の回答をもとに、   ①自己評価の変化の有無やその要因、特別支援教育に関わる実践や個人的な成果  ②２で示した成果と課題に対する感想、改善案  をワークシートに記入する。 | ワークシート |
| ５分 | 11 | ４【今後の活動の予告と協力へのお礼】   * 研究のまとめに向けたインタビュー調査実施の告知 * 協力に対するお礼 |  |

* 1. スライド資料

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
|  | スライド | 説明原稿 |
|  |  | 本日の研修の内容について確認します。 |
|  |  | 今日までご協力いただいた校内研修の内容を振り返ってみますと、このようになります。  だいたい１ヶ月ごとに意識調査アンケートにご協力いただきました。 |
|  |  | これから示すのは、意識調査の結果を一部抜粋したものです。全ての項目については、後ほどお手元の資料でご覧ください。  校内研修①でも１回目の結果をお示ししましたが、「全校的に特別支援教育を推進する上で最も重要だと考えること」を聞いた設問では、青の「全教職員の協力」が一番多く選ばれていることから、先生方も全教職員が協力することが特別支援教育の推進に繋がると考えていることが分かりました。結局、４回を通してずっと高い数値を示す結果となったのですが、１回目の結果を見て、校内研修の中で、障がい特性についての知識を共有していただいたり、学年グループごとに事例検討していただくといった、協働的に課題を解決する機会を設定しました。 |
|  |  | 校内研修直後に行った２回目の意識調査アンケートでは、次のような感想をいただき、半数以上の方が教職員同士の協議場面が有意義だったという感想を持ったようでした。 |
|  |  | その他の結果からも、校内研修直後の２回目や３回目の数値が高くなっているのが分かります。  自ら情報収集したり、学んだりしていると答えた方の割合も、 |
|  |  | 日常的に実践しているという方も、２回目で上がった数値が３回目まで高いままです。  ただ、ご覧の通り、最後に実施した４回目で数値が下がっています。 |
|  |  | 「特別支援教育に取り組むことは難しくないと感じる」という設問、これは、「自分にも実践できる」と自信を持つことができたかどうかを測りたかった項目ですが、こちらは、研修を重ねるごとに上がっていた数値が、４回目で研修前と同じ数値となっています。 |
|  |  | 以上の結果から、先生方自身が、協働的な学びを通して、一人一人の良さや取組を認め合った経験が、学校全体の取組として特別支援教育を推進していこうとする意欲の高まりにつながったと考えています。ただ、その意欲を継続していくというところに課題が残ったのではないかと分析しました。 |
|  |  | 以上が全体的な傾向なのですが、先生方個人個人の結果を見てみると、必ずしもこのような数値の変化にはなっていないと思います。  そこで、今日は、それぞれが「どのように変化していて、それはなぜなのか」ということや「事前アンケートを答えた時からこんな変化があった」具体的に「こんな取組をしてみた」などといったことを教えていただきたいと思います。  ただ、変化が無かったり、数値が下がったりしている方がいらっしゃったとしても、それが悪いことではないし、「意欲がない」ということとイコールではないということを確認させてください。  例えば、「学びを深めれば深めるほど、知識技能の不足に気が付き、自己評価が下がる」ということもありますので、変化の有無や数値の減少をあまり気にしすぎず、「なぜそうなったのか」という要因を具体的に書いていただけたらと思います。 |
|  |  | これまでの意識調査のそれぞれの回答と、先ほど説明しました「アンケート結果」（グラフ）を見ながら、ご自身の変化について振り返って気付いたことを、できるだけ詳細に書いてください。  設問１の記入を終えた方は、設問２に進み、今年度よりも更に、全教職員の協力のもと、全校的に特別支援教育を推進するために工夫できることなどのアイディアを書いていただけたらと思います。例えば、「こんな環境があればもっと取り組みやすい。」「こういう工夫ができそうだ。」など、斬新なアイディアも大歓迎ですので、よろしくお願いします。記入に関わって何か質問はありますか？ |
|  |  | お忙しいところ、意識調査や校内研修にご協力いただきありがとうございました。 |

* 1. ワークシート

|  |
| --- |
| 1. ４回の意識調査を見て感じたことを書いて下さい。（ご自身の意識の変化の有無とその要因について、実際に取り組んだこと、周りの教職員の変化、生徒や保護者の変化など） |
|  |
| 1. 今年度よりも更に全教職員で協力して特別支援教育に取り組むためには、どのような工夫があればよいと思いますか。 |
|  |